

# ザグレブ大学哲学部インド・極東学科日本学コース 15年の歩みと現状

森 葉月

<https://www.doi.org/10.17234/9789533791319.02>

はじめに

ザグレブ大学哲学部インド・極東学科日本学コースは、クロアチア共和国内唯一の日本研究機関として、2004年10月に設立されました。日本語、日本語学といった日本語教育関連科目に加え、文学、歴史、宗教思想、現代日本社会の諸問題、といった日本文化教育関連科目の教授・研究指導に当たっています。設立15周年を迎えたこの機会に、その歩みを振り返り、現状を紹介したいと思います。

## 1. 沿革

### (1) コース開設までの経緯

まず、コース開設までの経緯について述べていきたいと思えます。なお、下記の情報の多くは、当時コースの設立に関わった方々に2015年1月にインタビューを行った際に得られたものです。設立から10年余り経ってからのインタビューなので、不明瞭な点もあり、誤りが全くないとも言い切れませんが、当事者の記憶がそのようなものとして残っているという事実自体が、記録しておく価値のあるものと考えています。いずれにしても、もし何か不備があるとすれば、それは全て、インタビューを行い、記録を行った筆者の責任です。

ザグレブ大学哲学部における日本学コースの前身となる日本語公開講座がスタートしたのは、1995年のことでした。その開設を推進したのは、ザグレブ大学哲学部の現在のインド・極東学科（The Department of Indology and Far Eastern Studies）の前身である、東洋学・ハンガリー研

究学科 (The Department of Oriental Studies and Hungarology<sup>1</sup>) Milka Jauk-Pinhak 博士 (副学部長・当時、1939-2013、ザグレブ生、インド研究者) と Klara Gönc-Moačanin 教授 (1953-2019、レンダヴァ生、インド研究者) です。氏らが設立に向けて実際に活動を始めることになったきっかけは現在のところ不明ですが、Gönc-Moačanin 教授は『源氏物語』の一部をクロアチア語に翻訳したり、アジアの芸能に関する講義の中で日本の能楽等を取り挙げたりするなど、日本文学に造詣が深かったため、彼女の「想い」の強さが一つの牽引力になったのかもしれませんが。また、Vladimir Devidé 氏 (1925-2010、ザグレブ生、数学者、著述家) が日本留学後に出版した俳句や日本文化に関する著作によって、クロアチアにおける日本文化に対する関心が高まっていたことも契機の一つとなった、との推測も可能だと考えられます<sup>2</sup>。

Jauk-Pinhak 博士は、日本語教師を捜すことから始めました。まず、国際交流基金の奨学金を得て日本に留学し、現在建築家として活躍する Melita Rački 氏に相談したそうです。Rački 氏はやはり日本に留学経験のある理論物理学者 Franjo Štiglic 氏を強く推薦し、Štiglic 氏に白羽の矢が立ったといいます。

Štiglic 氏は当初、自分は日本語教育の専門家ではない、という躊躇もあったとのことなのですが、学部からの再三の呼びかけに応じて、この依頼を受けたそうです。そして上述の通り、1995年にクロアチア初の日本語講座開講が実現しました。この時、哲学部の受講希望者の募集に対して50名をはるかに超える学生が来たといいますから、当時から日本語に対するクロアチア人の興味は高かったということが窺えます。人口80万人弱のザグレブという都市で、当時はインターネットなどもなく、告知はアナログなものであったことを考えれば、その「日本語熱」の盛り上がりは、相当なものだったということでしょう。

Štiglic 氏は手づくりの教科書を使い、全くの初心者であった学生たちに日本語を教えたそうです。これもたくさんの教材がインターネットで

<sup>1</sup> ザグレブにおけるインド研究の歴史は古く、1874年に遡ります。当初は <Department of Linguistics and Oriental Studies> において、後に <Department of Oriental Studies and Hungarology> においてインド研究がなされていました。2004年に現行の <Department of Indology and Far Eastern studies> という学科として「独立」しました (インド・極東学科の学科を説明した学内書類より)。現在インド・極東学科は、インド学科、中国学コース、日本学コースから成っています。

<sup>2</sup> Vladimir Devidé 氏の著作には、„Japanska haiku poezija i njen kulturno povijesni okvir (日本の俳句とその文化的・歴史的枠組み)” [1970]、„Japan - tradicija i suvremenost (日本—伝統と近代)” [1978]、„Japan - prošlost i budućnost u sadašnjosti (日本—現代に見られる過去と未来)” [1978, 1988再版]、„Iz japanske književnosti (日本文学から)” [1985]、„Japan - poezija i zbilja (日本—詩と現実)” [1987]、„Japan za djecu (子どものための日本紹介)” [1987]、„Razgovori o haiku poeziji (俳句をめぐる対話)” [1991]、„Zen (禅)” [1992]、„Renge (連歌)” [1995]などがあります。(書名の日本語訳は筆者によるもの。意識しているものもあります。)

入手できる現在から見ると、隔世の感を覚えざるを得ません。この講座が何年まで続けられたかについては現在のところ確認できていませんが、少なからぬ学生が熱心に学び、中には日本語能力試験に挑戦して合格した者もあるとのこと（受験級・人数は不明）。それは、時には自宅へ学生を招いて特別授業を行ったり、氏の夫人で日本人である満寿美氏が日本料理を振舞い、日本文化についても体験させたりするなどの、氏らによる献身的な指導の成果に他なりません。

その後、2001年秋から2004年夏まで、ユカリ・ヒル氏<sup>3</sup>が日本語講座を担当し、一コマ90分のクラスを週2回提供されました。初年度は40名以上の受講希望者があり、選抜試験ではなく、すべての希望者を受け容れました。ヒル氏の当時のステータスは「Senior Lecturer」と呼ばれるもので、正確な金額は記憶にないが、学部の規定でそのステータスに支払われることになっている額を給料として受け取っていたと思う、とのこと。

そしてこの頃、2001年頃から、前述の Jauk-Pinhak 博士や Gönc-Moačanin 教授を中心に、日本語だけでなく、日本文化についても学ぶことができる、「日本学」コースの開設準備が本格的に進められるようになりました。更に2003年6月頃から、当時の駐クロアチア大使であった池田要氏が、Miljenko Jurković 哲学部学部長、Helena Jasna Mencer 大学総長、Dragan Primorac 科学教育スポーツ省大臣らに対する交渉を開始しました（肩書は全て当時のもの）。池田元大使の着任以前から、在クロアチア日本国大使館は日本学コース設立のバックアップを行っていたとのことですが、どのようなきっかけがあり、どの時点から開始していたのかは、現在のところ不明です。ともあれ、文部科学省出身で教育事業のエキスパートである池田大使を得て、その構想は実現に向けて大きな進展を見せました。とはいうものの、その道のりは決して平坦なものではなかったようです。

日本学コース設立のためには哲学部とザグレブ大学のそれぞれの評議会における承認が必要であるため、会議の開催日を調べ、会議の前には議案に日本学コース設立の件を加えてあるかどうかを確認し、会議後にも実際に会議の中で案件が審議されたかを確認し、もしされていなければ次回の会議の議案に加えてもらえるよう念押しする…といった、積極的、集中的な、粘り強い働きかけが行われたそうです。

ヒル氏は当時を振り返り、次のようなエピソードを語ってくださいました。明確な時期は定かではないが、在クロアチア日本国大使館か

<sup>3</sup> ヒル氏はその後サラエボへ移住され、2013年よりサラエボ大学にて、日本語講座を開設、授業を担当されました。開設以来、学生から社会人まで幅広い年齢層の学習者がこの講座を受講し、熱心に日本語を学んでいるそうです。

ら日本学コース設立提案書が大学へ提出されて数日後のある日、ヒル氏は、Gönc-Moačanin 教授と共に、学長（あるいは学部長だったかもしれないが、恐らく学長であった可能性が高いとのことなので、以下便宜的に「学長」とします）の部屋へ呼び出されました。そこで学長が突然、「日本学コースの設立は難しい」と告げたといいます。それに対して Gönc-Moačanin 教授がクロアチア語で激しく抗議を始めました。早口のクロアチア語でまくし立てる二人の会話の内容の詳細は、ヒル氏には分かりかねたそうです。事情も何も分からず、どんな返答もできなかったそうですが、それは当然の反応です。しかしヒル氏はこれがとにもかくにも「緊急事態」であると悟り、大使館の担当者に急いで電話をしました。その時担当者は席を外しており、電話を受けた他の職員から「後でかけ直して欲しい」と言われましたが、とにかく「急用だ」と言って電話を繋いでもらい、事情を説明したのだそうです。池田大使は、「大学には日本研究ができる場所があるべきだ」という主張を軸に、日本学コースの設立を推進していました。これには当時の学部長、学長、教育・科学大臣ともに賛同を示し、何の異論もなかったそうです。しかし一方ではこのような事態も起っていたわけで、このエピソードは、ザグレブ大学哲学部で一つのコース・学科を設立することの難しさを示すものの一つと言えましょう。

こうした出来事のあと、何がそうさせたのかは想像するより外ないのですが、状況は変わり、その後のスケジュールを考えると、2010年の4月か5月頃までには、日本学コースの設立を、哲学部、大学当局、教育・科学省の全てが認めたと考えられます。政府開発援助（ODA）の一貫である外務省の〈文化に関する無償資金協力・一般文化無償資金協力〉により、ザグレブ大学哲学部に日本語学習機材・視聴覚機材（1,730万円）が寄付されたこと、国際交流基金からの助成（下記に詳述）が行われたことなどが、彼らを動かした大きな要因の一つではなかっただろうかと思われまふ。

ただし、当時交渉に関わっていた人たちの印象によると、クロアチア側の人びとにとっては、はじめから5年制ではなく、3年制のコースとしての設立が前提になっていたようだったということですが、その理由についても現在のところは、定かではありません。

このように、日本語・日本文化教育に関わる人びと、大使と大使館スタッフの努力が実を結び、2004年10月14日に、日本学コースのオープニング・セレモニーが行われました<sup>4</sup>。

<sup>4</sup> 学科となることですが、こうした経緯が明らかになれば、正規学科化となるために取るべき方策を探るためのヒントとなるかもしれません。継続して、当時設立に関わった方たちへのインタビューなどを進める予定です。期にスタートしていますが、中国学コースの設立と日本学コースの設立の間に何らかの関連性があるのかどうかについては、これも現在のところ不明で



初期の卒業生たちと矢田侑三、栗原先生幸子外国人講師

(1) 教員

2004年当初、日本人外国人講師2名（矢田侑三外国人講師、栗原幸子外国人講師）が日本国際交流基金から助成を受けながら、それぞれ日本語関連教科、日本文化関連教科を担当していました。その後学生数の増加に従い、助手、非常勤講師が加わり、専任講師も増えました。これま

矢田雄三 (Yuzo Yada)	2004 - 2012
栗原幸子 (Sachiko Kurihara)	2004 - 2009
村田恵美 (Emi Murata Margetić)	2006 -
亀田真澄 (Masumi Kameda)	2007
Iva Lakić Parać	2008 -
Maja Skender Lizatović	2009
Irena Srdanović	2009
森葉月 (Hazuki Mori)	2010 - 2023
日下部慧 (Satoshi Kusakabe)	2011 - 2016
Kamelija Kauzlarić	2013 - 2018
Katarina Šukelj	2015 -
Velna Rončević	2016 -
鮎川慎 (Shin Ayukawa)	2017 - 2018
立木雅彰 (Masaaki Tachiki)	2019
竹内淳之介 (Junnosuke Takeuchi)	2020
神谷佳那 (Kana Kamiya)	2021
小西知代 (Chiyo Konishi)	2022
上林 彰仁 (Akihito Uebayashi)	2023 -
Ivana Moguš Yamada	2023 -

す。後に述べるように日本学コースにとっての目標の一つは、5年制の正規学科となることですが、こうした経緯が明らかになれば、正規学科化となるために取るべき方策を探るためのヒントとなるかもしれません。継続して、当時設立に関わった方たちへのインタビューなどを進める予定です。

でに日本学コースに関わった教員は下記の表の通りです。

- 亀田真澄非常勤講師（当時）は、ザグレブ大学哲学部に留学中でした。東京大学文学部大学院人文社会系研究科（現代文芸論）を経て、現在（2020年）は Massachusetts Institute of Technology Comparative Media Studies の客員研究員。専門はロシア東欧文化。
- Maja Skender-Lizatovic 非常勤講師（当時）は、日本学コースの1期生。現在は York St John University の講師。専門は日本言語学。
- 2011年度～2013年度、国際交流基金の助成を受けて、選択科目として<日本宗教思想史入門>が開講され、森葉月外国人講師（当時）がこれを担当しました。
- 2012年度～2015年度、国際交流基金の助成を受けて、選択科目として<実践日本語会話>が開講され、村田恵美非常勤講師（当時）がこれを担当しました。

この他、これまでに、伊藤守幸学習院女子大学教授（当時）、柴宜弘東京大学教授（当時）などが、日本国際交流基金の助成を受けて、特別講義を行っていただきました。

※伊藤守幸学習院女子大学教授…日本文学入門集中講義 「日本古典文学：特に平安時代の文学（物語）」を、2008年9月15日～10月14日



哲学部紹介リーフレットの中にある日本学コースの紹介  
（クロアチア語版2015年発行）

	科目名	授業形態	単位*
日本語 教育 関連 科目	Japanese Linguistics 1	講義	3
	Japanese Linguistics 2	講義	3
	Japanese Exercise 1	演習	4
	Japanese Exercise 2	演習	4
	Japanese Exercise 3	演習	4
	Japanese Exercise 4	演習	4
	Japanese Exercise 5	演習	4
	Japanese Exercise 6	演習	4
	Japanese Reading and Writing 1	演習	2
	Japanese Reading and Writing 2	演習	2
	Japanese Reading and Writing 3	演習	2
	Japanese Reading and Writing 4	演習	2
	日本 文化 研究 関連 科目	Introduction to the Japanese History 1	講義
Introduction to the Japanese History 2		講義	3
Introduction to the Japanese History 3		講義	3
Introduction to the Japanese History 4		講義	3
Introduction to the Japanese History 5		講義	3
Introduction to the Japanese History 6		講義	3
Introduction to the Japanese Literature 1		講義	3
Introduction to the Japanese Literature 2		講義	3
Introduction to the Japanese Literature 3		講義	3
Introduction to the Japanese Literature 4		講義	3
Introduction to the Japanese Literature 5		講義	3
Introduction to the Japanese Literature 6		講義	3
Contemporary issues of Japanese Society 1		講義	3
Contemporary issues of Japanese Society 2		講義	3
Japanese religions and philosophies 1	講義	3	
Japanese religions and philosophies 2	講義	3	

※柴宜弘東京大学教授... 日本史入門集中講義「近現代日本史」、  
2009年3月開講。

(途中に休日あり、13回) に開講。

### (3) カリキュラム

設立当初より3年制で、日本語関連科目に加え、日本文学入門および日本史・日本文化入門などといった日本文化関連科目について、合計20

<sup>5</sup> 当初は計16齣/週でした。リュブリャナ大学（スロヴェニア）文学部アジア・アフリカ研究学  
科日本研究講座と本学部インド極東学科間の協定が結ばれた後、2016年から「日本語演習」が2  
齣/週から3齣/週に増え、日本文化関連科目（「現代日本社会の諸問題」「日本宗教思想」）  
も加えられました。

齣（1齣90分）／週の授業・講義を行っています<sup>5</sup>。科目名と授業形態、取得可能単位については、右の表の通りです。

これらは全て、日本学コースを修了するための必修科目です。ただし、これらの科目を全て受講することが、学位取得にはつながりません。当コースは「Slobodni studij（逐語的に訳すと、「free study」。学位の取得を目的としない学習、というような意味）」と呼ばれるプログラムだからです<sup>6</sup>。日本学コース受講生は課程を終えると、ザグレブ大学哲学部発行の「日本学コース修了証明書」を受領することができます。

日本語関連科目は「1」から始まり、数字が大きくなるほど、学習レベルが進みます。基本的には、より小さい数字が附された授業の学期末試験に合格しなければ、次のレベルの授業を受講することができません。例えば、＜Japanese Exercise 1＞の試験に合格しなければ、＜Japanese Exercise 2＞を受講することはできません。

ちなみに、日本文化研究関連科目も同様に「1」から始まりますが、これらについては、上記の規則は適用されません。具体的には例えば、前年度に＜Introduction to the Japanese History & Culture 1＞を受講していれば、学期末試験に合格することができなくても、次の＜Introduction to the Japanese History & Culture 2＞を受講することができます。これは、日本文化研究関連科目の学習内容が、学習進度に応じてではなく、通史的に構成されているため、可能となっています。

日本語学習については、3年間で Japanese exercise（日本語演習）405時間、Japanese Reading and Writing（読解作文）90時間、Japanese Linguistics（日本語学）45時間、合計540時間を行い、B1～B2レベル（JF Cando）への到達を目標としています。

日本文化関連科目は、文学と歴史の授業については古代から始まり、近現代までをカバーしています。現代日本社会の諸問題と日本宗教思想の授業では、日本文化や社会をより深く理解するために重要ないくつかのテーマを取り挙げています。いずれも、当プログラム修了後に、受講生たちが自らの研究テーマをより深く掘り下げていくために必要な知識やものの見方を身に着けることができるようにすることが、一番のねら

<sup>6</sup> ザグレブ大学の他学科や他大学に所属する学生は文化関連科目を受講することができ、そうした科目の学期末試験に合格した場合には、この表に示された単位を取得し、卒業要件単位とすることができます。また上述の、リュブリャナ大学文学部日本研究講座との協定により、当コースを修了した学生は、リュブリャナ大学日本研究講座の3年次に編入できる資格を、これらの単位で満たすことができると見なされます。



いです。

#### (4) 課外活動・特別活動

上記の授業以外に、課外活動・特別活動として、下記のような取組みを行っています。

##### 1. 日本語スピーチコンテスト

毎年、在クロアチア日本国大使館、クロアチア日本語教師会と協賛でスピーチコンテストを行っています。このコンテストはスピーチ部門及びパフォーマンス部門から構成されています。スピーチ部門で参加者は、4分の制限時間内に、自由なテーマについて、自分の考えを日本語で発表します。パフォーマンス部門では、3分～4分の時間内で、日本に関連するスピーチ、歌、踊り、詩の朗読などを日本語で行います。団体の部と、個人の部があり、団体の部では参加者は、寸劇を行ったり、日本の伝統芸能に関わるパフォーマンスを行ったりしています。過去には、当コースの学生や卒業生が、相撲甚句や狂言『附子』の一場面を披露したこともあります。スピーチ部門にも当コースの学生が毎年出場し、何人もの学生が上位入賞を果たしています。例年、日本語とクロアチア語で大会の司会を努めているのも当コースの学生です。



2016年のコンテスト、団体部門優勝のシュテ  
フォックさん、ゼニチさん

##### 2. <にほんご●だんわしつ>

学生たちにとって、クロアチアでは、授業以外で日常的に「自然な」日本語を耳にし、また自分でも話してみる、ということが難しいことです。また、間違えることを怖がってあまり日本語会話をしない学生も多く、そうしたことが原因で、せつかく文法はしっかり勉強し、言葉も学んでいるのに、「話せない」という悩みを抱える学生が少なくありません。そこで、<にほんご●だんわしつ>を開催し、間違えても恥ずかしいと思わずにどんどん話せるような雰囲気の会合を持つことにしてい



2016年5月のだんわしつの様子

ます（以前は週一回行っていましたが、この2年ほどは不定期開催となっています）。在留邦人や、日本から訪れた方たちに協力を仰ぎ、出来る限り様々な日本人の「自然な」日本語に触れ、また自分の言ったことが「伝

わる喜び」を学生に感じてもらう機会をつくるよう努力しています。毎回5～10名の学生、卒業生やその友人らが参加しています。ここ数年は、ザグレブ大学哲学部や農学部などに留学している協定校の日本人大学生たちが積極的に協力してくれ、お互いの言葉や文化についてプレゼンテーションを行い、その後ディスカッションをするなどして、文化交流を深める場となっています。中にはその後も交流を続け、日本の大学に留学した際に一緒に旅行したり、何か生活や学習上の問題がある時には助け合ったりと、友情を深めている学生たちもいます。

### 3. 他大学生・高校生との交流

日本の大学生や高校生がフィールド・トリップや修学旅行などでクロアチアを訪問した際に、研究交流会を開催しています。具体的にはこれまでに、学習院女子大学、同志社大学、北星学園高校などとの交流会を行ってきました。その中で日本人学生・生徒たちは日本の文化についてのプレゼンテーションを行い、当コースの学生たちも、クロアチアの文化についてのプレゼンテーションを行いました。こうした交流会は、お互いにとって、より深く相手の文化について知る機会となり、またこれも、友人を得る機会となっています。今後こうした機会を通して、学生の学習動機を高め、また異文化理解そのものを深化させることを目指したいと考えています。

### 4. 年中行事

新年会や忘年会、お花見など、日本の年中行事を取り入れ、懇親会を開いています。教員にとっては、教師にとっては学生がいま必要としているものを知るチャンスであり、学生たちがクラスメイトとの親睦を深めることによって「間違えたら恥ずかしい」と日本語を話すことをためらう雰囲気を変えていくことができるチャンスでもあります。学生にと

っても、日本の文化を理解することができ、これも日本語学習・日本文化研究を続ける動機を保つ良い刺激となっているようです。こうした行事には卒業生たちも参加しており、卒業生たちにとっては、日本語・日本文化に改めて触れる機会を、在籍生たちにとっては、卒業生たちからアドバイスをもらったり、励ましてもらったりできる機会ともなっています。このような活動は、日本学コースを中心に日本語・日本文化を愛するひとたちの拠点の一つをつくっていきたいというのが、当コースのスタッフの希望の反映でもあります。

(5) 入学試験・受講料

<定員>

日本学コースの定員は年度によって若干異なりますが、開設当初より、25～30名を受け入れています。これまでほぼ毎年定員数を前後する応募者があり、選抜試験を行っていましたが、ここ数年は、ユライ・ドブリラ大学（プーラ大学）社会科学部日本学科が設立されたり、語学学校で高いレベルの日本語が学べたりするようになってきたためか、入学希望者数は減少傾向にあります。

各年度の定員、入学試験受験者数と、実際に入学した学生の数は、以下の表の通りです。

<試験方法>

例年9月中旬に、哲学部より受講生募集の告知がなされ、受講希望者数が定員を上回る場合には、日本学コース教員によって、選抜試験が行われてきました。試験は筆記試験と口述試験です。筆記試験では、設立当初より、「何故日本学コースで学びたいのか」という、受講の動機が問われています。2012年より、学生が学習意欲を持っているかどうか判断するために、課題図書を指定し、その内容の要約と、それに対する感想・分析を書かせる方法が導入されました。口述試験では、主に、授業・講義に定期的に参加することができるか、ということが確

	定員	受験者数	入学生数
1期生 (2004年度入学)	25	—	27
2期生 (2005年度入学)	25	47	25
3期生 (2006年度入学)	25	—	22
4期生 (2007年度入学)	25	—	21
5期生 (2008年度入学)	25	45	20
6期生 (2009年度入学)	25	28	21
7期生 (2010年度入学)	30	32	30
8期生 (2011年度入学)	30	48	28
9期生 (2012年度入学)	30	28	23
10期生 (2013年度入学)	30	34	28
11期生 (2014年度入学)	30	27	26
12期生 (2015年度入学)	30	28	28
13期生 (2016年度入学)	30	25	25
14期生 (2017年度入学)	30	14	14
15期生 (2018年度入学)	30	13	13
16期生 (2019年度入学)	30	22	20
17期生 (2020年度入学)	30	13	13
合計		404	384

※2004、2006、2007年度の受験者数については、記録が残っていません。

認されます。

#### <受講料>

2004年度から2013年度までは、この選抜試験の成績上位者には、3年間の受講料が無料となるいわゆる特待生制度がありました。年度によってこの制度を受けられる学生数は異なっており、概ね上位15～20位までの学生が受講料を免除されていました。例えば2010～2012年度は、定員が30名で、上位20位までの学生は受講料が無料、21～30位までの学生は、2,000 KN/年の受講料を支払っていました。学部の方針の変更により、2013年度には、上位5名のみが受講料を免除され、6位から20位までの学生は1,500 KN、21～30位の学生は3,000 KNを支払う形に、次いで2014年度からは、全ての受講生が3,000 KN/年を支払う形に変更されました。その後さらに変更があり、現在は、全ての新生は1年次の授業料として2,000 KN/年を支払う必要があります。1学年終了時の学期末試験の成績上位者には2年次以降の受講料を減免または免除する、という形になっています。<sup>7</sup>

#### (6) 受験生の特徴

##### <受講の動機>

受験を決めた動機として、多くの受験生が、日本文化への興味、あるいは日本語という言葉そのものに対する関心を挙げています。クロアチアに進出し日本人駐在員が常駐する日本企業がないためか、日本語を将来の就職に役立てようとの動機はほとんど見られません。

次ページの表は、選抜試験の際に受験生が挙げた、日本学コース受講の動機をまとめたものです。

日本語そのものの魅力、という点について付け加えると、クロアチア共和国には、日本語を教える外国語学校が数校あり、中には多くの生徒を擁しているところもあります。また、ザグレブ第7高等学校およびザグレブ芸術高等学校において、日本語が第二外国語の選択科目として教えられていたこともあります（但し2013年まで）<sup>8</sup>。以前は高校で選択

<sup>7</sup> この点については、毎年変更の可能性があるので、関心をお持ちの方は、当コースのウェブサイト (<https://japanologijaffzg.wixsite.com/home>) をご覧ください。現時点では、2・3年次の授業料は、学期末試験の総合成績に応じて決定しています。1-5位の学生は無料、6-20位の学生は2,000HRKN/年、21位以下の学生は3,000HRKN/年を支払うことになっています。

<sup>8</sup> その他、リエカ市にある Narodno učilište Rijeka や Klub Mladih Rijeka などといった市民や青年向けの公開講座でも日本語の授業を受けることができます。Makoto hrvatsko japansko društvo (誠クロアチア日本協会) というNPO団体でも無料の初級日本語を教えています。

科目として日本語を学んだことがある者が、当コースへ入学することがままありました。また、ここ数年は、当コース入学以前に外国語学校や公開講座で学んだ者、インターネットサイトやモバイルアプリを利用して独学で日本語を学んでいる者も少なくありません。

こうした学習歴がありながら、初級レベルから学習し直す必要がある大学のコース（全ての受講生は、基本的に、初級クラスから学習をスタートしなければなりません<sup>9</sup>）に入ってくるのは、体系的に日本語を学び、更に日本文化を知ることにより、日本への親近感をより深めようとする欲求があるからではないかと推測されます。加えて、外国語学校に較べて、受講料が低いこと、文化についての授業が提供されていることも、彼らがザグレブ大学の日本学コースを受講してみようとする理由

---

<sup>9</sup> 学生が既に到達しているレベルによっては、そのレベルを確認するための試験を行った上で、「飛び級」を認めることもあります。

の一つだと思われます。

受講生の学習目的 (複数回答)	2005	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	計
日本の文化 (芸術・文学・言語・歴史・生活習慣) に関する知識を得るため 合気道、空手、剣術、忍術、五輪の書、忍術、茶道、神道、漢、武士道、将軍、 歌舞伎、陶芸、建築 (妹島和世、安藤忠雄)、フアッション (川久保玲)、映画、 枕草子、俳句、三島由紀夫、川端康成、村上春樹、吉本ばなな、大江健三郎、アニメ、 漫画、高級留置子、ロリータフアッション、伝統と近代の共存 など	38	40	23	23	38	22	28	20					10		
日本の政治・経済・社会に関する知識を得るため 政治や選挙制度、60年代の雄飛、品質管理 (特に製造業)、勤労さ、社会発展、外交、 貿易、ジェンダー、日本とロシアの経済関係、引きこもり、パチンコ など	7	2	3	1	3	2	4	3					-		
日本の科学技術に関する知識を得るため 人工知能について学びたい	1	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
受験準備のため (大学・大学院、資格試験、その他の試験)	-	-	-	-	-	-	-	-					1		
日本に留学するため アニメの学校へ行きたい	-	-	-	2	3	-	1	1					1		
今の仕事で日本語を必要とするため 日本語で書かれた研究文献を読む必要がある、など	-	-	-	1	-	-	1	2					-		
将来の就職のため	1	-	1	1	3	1	1	2					1		
日本に観光旅行するため	1	-	-	-	-	-	-	-					3		
日本との親善・交流を深めるため (短期訪日や日本人受入のため)	-	-	-	-	-	-	-	-					-		
日本語によるコミュニケーションができるようになるため 配偶者が日本人、旅行先で出逢い、友人になった日本人ともっと話したい、など	-	-	3	-	-	-	1	1					-		
母語、または親の母語 (継承語) である日本語を忘れないため	-	-	1	-	-	-	-	1					-		
日本語という言語そのものへの興味があるため	1	5	9	10	4	8	5	6					13		
国際理解・異文化理解の一環として	-	-	-	-	-	-	-	-					-		
父母の希望に応えるため	-	-	-	-	-	-	-	-					-		
その他	-	-	-	-	-	-	-	-					-		
回答者総数	47	45	28	32	48	28	34	27							

※ 2004、2006、2007年度の受験者については、記録が残っていません。

<受講生の属性>

受講生の多くはザグレブ大学哲学部の在學生ですが、他学部の学生、他大学の卒業生、社会人もいます。ザグレブ大学哲学部の在學生は、様々な学科に所属しています。受講資格として、ザグレブ大学の3年生以上であるか、他の大学で4年ないし5年のプログラムを終えていなければ日本学コースには入学できない、というルールがあるため、学生の場合、それぞれの専攻の3年生か、それ以上の学年の者のみが日本学コースに所属しています。つまり、学生は、ダブル・メジャーの場合は2つ、シングル・メジャーの場合は1つ専攻する学問研究分野で学びながら、または働いたり、時には職を捜しながら、日本語・日本文化についても学んでいる、20歳以上の人たちです。

受講生の専攻・職業の分布は、次ページ以降の表の通りです。

受講生の構成は、ザグレブ大学哲学部の語学・文学・地域研究系で学んでいる者が多く、先に挙げたように、日本語そのものに魅力を感じたことが学習動機として最も多く挙げられていることとも整合しています。次いで人文・社会学系の学生、それに政治学、工学、生物学などの他学部の学生、社会人、求職中の人が続きます。



32 森 葉月 ザグレブ大学哲学部インド・極東学科日文学コース15年の歩みと現状

受講学生専攻・職業		2004	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	計	合計
医学	医学	1							1							2	4
	歯学				1											1	
	リハビリテーション・サイエンス							1								1	
運動学	運動学					1										1	1
音楽	音楽学					1			1							2	2
観光学	観光学					1										1	1
経済学	経済学		1	2	1	2	2		1							9	9
建築学	建築学							1	1							2	2
工学	航空工学			1												1	9
	情報工学		2	1												3	
	造船学				1											1	
	電子工学				1	1	1									3	
	土木工学					1										1	
語学・文学・地域研究系	イタリア語		3		2	1	1	1								8	108
	インドロジ	1	2		3		2	1								9	
	ウクライナ語		1													1	
	英語	7	8	5	3	2	5	3	1							34	
	音声学					1			1							2	
	クロアチア語								2							2	
	言語学		1						2							3	
	スウェーデン語			1			1	1	1							4	
	スペイン語			1		1										2	
	スロヴァキア語								1							1	
	スロヴェニア語							1								1	
	チェコ語			2			1									3	
	ドイツ語		1		2					1						4	
	トルコ語		1		3											4	
	比較文学		5		1		1	2								9	
	フランス語		2	3	1	1	2	3								12	
	ポーランド語									1						1	
ポルトガル語									1						1		
ラテン語					1										1		
ロシア語			3				2	1							6		
人文・社会学系	教育学					3		1	1							5	68
	考古学	2			1	2			4							9	
	社会学		3	1			1									5	
	情報科学					1	2	3	3							9	
	心理学		2						1							3	
	神学		1				1									2	
	哲学		5	2		1	2	3								13	
	美術史	2	1		1	1			1							6	
	文化人類学		2	1	1		1									5	
	歴史		2		2				3	4						11	
数学	数学				1										1	1	
政治学	国際政治学	6														6	16
	ジャーナリズム		2	2		1										5	
生物学	政治学		3	1	1											5	8
	バイオテクノロジー		1					1								2	
地質学	バイオロジー		2	2		2										6	1
	地質学				1											1	
農学	農学					1	1									2	2
	アニメーション				3	2										5	9
美術	グラフィック・デザイン			1	1		1								3		
	グラフィック						1								1		
物理学	地球物理学			1				1								2	2
法学	法学	1	2		1	2		1								7	7
林学	林学							1								1	1
計																251	



	2004	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	計
オーケストラ奏者									1						1
音楽教師							1		1						2
会社員		5			1	3									9
公務員						1									1
語学教師					1	2		1	2						6
グラフィック・デザイナー						1									1
ジャーナリスト						1									1
出版社								1							1
船員								1							1
大学教職員					2	1			3						6
フライトアテンダント								1							1
プログラマー								2							2
翻訳家			1				1								2
歴史教師								1							1
求職中					1										1
															36

※ 2006～2008年度の受験者については、記録が残っていません。ダブル・メジャー制によってほとんどの学生は2つの専攻分野を持つため、この表の合計数と、受講者合計数は一致しません。

(7) 受講生の日本留学

これまでに奨学金を受けて日本へ留学した学生は、設立当初から数えて、2020年10月時点でのべ35名となります。ほとんどが日本国政府（文部科学省）奨学金や国際交流基金の助成を受けて日本で学んでいます。留学後の進路は中高等教育機関に勤める者、日本人観光客のガイド、翻訳者などとして働いている者、専攻の学問研究分野で学ぶ中で身に着けた知識や技術を活かした職に就いている者など、様々です。日本人の皆さんが支払った税金からサポートを受けて日本で学ぶことができたことを忘れずに、何かの形でクロアチアと日本の交流の懸け橋となり、今後も活躍してもらいたいと思います。

(8) 修了者数

当コースが設立された2004年から2020年10月までの間に総計384名が日本学コースでの学習を開始しましたが、3年間の全課程を修了した学生は62名です（2020年12月現在）。入学者数に較べて修了者数が少ないことは否定できない事実ですが、その主な原因は、先にも述べたように、1つまたは2つの専攻に加えて、あるいは働きながら日本語・日本文化を学ぶことは時間的に難しく、諦めてしまう学生が多いためであって、学習意欲が下がってしまうためではないと考えられます。数年休学した後に復学する学生や、何年かかっても修了することを目指している学生がいるということが、そのことを証明していると思われます。

## (9) 修了生の動向

修了生の動向を列举してみたいと思います。

[留学し、研究を継続している修了生]

特に日本へ留学する者、スロヴェニアのリュブリャナ大学文学部アジア・アフリカ研究学科日本研究講座への進学者の割合は多いです。中にはオクスフォード大へ留学して博士号を取得し、イギリスで大学教員として働いている人もいます。

[観光業に従事している修了生]

ザグレブ市の公式ガイドの資格を取得した修了生が現時点（2020年12月）で4名います。

[日本語教師として学生を教えている修了生]

ザグレブ大学哲学部やユライ・ドブリラ大学プーラの教員や、語学学校の講師、日本語家庭教師などとして日本語・日本文化を教えている修了生も数人います。

[日本留学後に日本の企業、教育機関、自治体などに就職した修了生]

企業で職を得た者は、特に理系の学生に多いです。ソフトウェアエンジニアや工学・理学系の分野で活躍しています。

	定員	受験者数	入学生数	修了者数
1期生 (2004年度入学)	25	—	27	12
2期生 (2005年度入学)	25	47	25	7
3期生 (2006年度入学)	25	—	22	0
4期生 (2007年度入学)	25	—	21	3
5期生 (2008年度入学)	25	—	20	4
6期生 (2009年度入学)	25	28	21	5
7期生 (2010年度入学)	30	32	30	4
8期生 (2011年度入学)	30	48	28	1
9期生 (2012年度入学)	30	28	23	3
10期生 (2013年度入学)	30	34	28	9
11期生 (2014年度入学)	30	27	26	10
12期生 (2015年度入学)	30	28	28	2
13期生 (2016年度入学)	30	25	25	2
14期生 (2017年度入学)	30	14	14	
15期生 (2018年度入学)	30	13	13	
16期生 (2019年度入学)	30	22	20	
17期生 (2020年度入学)	30	13	13	
合計		359	384	62

## [翻訳家]

クロアチアの法廷翻訳家として公的に認められた修了生もいます。

直接日本語・日本文化に関わらない仕事をしている者も勿論多いですが、卒業生たちは、日本学コースで学んだことは、人生に大きな影響を与えたと語っています。

## (10) 外部資金獲得状況

「(1) コース開設までの経緯」においても述べたように、2004年には、政府開発援助(ODA)外務省<文化に関する無償資金協力・一般文化無償資金協力>として、ザグレブ大学に、日本語学習機材1,730万円相当が 供与されています。これらの機材の中でも、カセットテープを利用したLL機材、当時のPCなどは、現在となっては活用が難しいというなやましきもありますが、当初はクロアチアにおける日本語・日本文化教育の発展に寄与するものでした。

その他、国際交流基金から、日本語学習教材や図書館資料の

拡充、教員の給与助成、日本語スピーチコンテスト・日本語発表を開催するための助成など、多くの助成を受けて、当コーの教育環境は整備されてきました。教員たちの教授法の向上のためのサポートプログラムも、国際交流基金の助成を受けて実現しています。



哲学部 A-205、A-204 教室には、現在も供与された教材が設備されています。

## &lt;国際交流基金日本語教材寄贈プログラム&gt;

受領年度	プログラム	受領内容	受領総額 (円)
2002	国際交流基金日本語教材寄贈プログラム	書籍 16 冊	106,480
2004	国際交流基金日本語教材寄贈プログラム	書籍 21 冊	86,833
2005	国際交流基金日本語教材寄贈プログラム	書籍 20 冊	42,367
2006	国際交流基金日本語教材寄贈プログラム	書籍等 18 件	97,044
2007	国際交流基金日本語教材寄贈プログラム	書籍 12 冊	72,686
2008	国際交流基金日本語教材寄贈プログラム	書籍 25 冊	83,445
2009	国際交流基金日本語教材寄贈プログラム	書籍 21 冊	71,797
2010	国際交流基金日本語教材寄贈プログラム	書籍 35 冊	101,559
2012	国際交流基金日本語教材寄贈プログラム	書籍 26 冊	69,400
2013	国際交流基金日本語教材寄贈プログラム	書籍 34 冊	127,628
2014	国際交流基金日本語教材寄贈プログラム	書籍 25 冊	97,700
計			956,939

## &lt;教員拡充等&gt;

受領年度	プログラム	受領内容	受領総額
2004	海外日本語講座助成	専任講師給与	41,308.36 HRK
2005	海外日本語講座助成	専任講師給与	41,293.94 HRK
2006	海外日本語講座助成	専任講師給与	42,300.87 HRK
2008	客員教授派遣 (経費助成) 助成	客員教授謝金	10569.44EUR
2011	日本研究機関支援	教員拡充助成	3,814.48EUR
2012	日本研究機関支援	教員拡充助成	4,067.09EUR
2013	日本研究機関支援	教員拡充助成	4,893.76EUR
2013	海外日本語講座助成	現地講師謝金	18,000 HRK
2014	海外日本語講座助成	現地講師謝金	18,000 HRK
2015	海外日本語講座助成	現地講師謝金	18,000 HRK
計			178,903.17 HRK
計			23,344.77 EUR

<日本語普及活動助成プログラム>

受領年度	プログラム	受領内容	受領総額 (Euro)
2008	国際交流基金海外 日本語弁論大会 寄贈プログラム	書籍 37 冊	
2009	国際交流基金海外 日本語弁論大会 寄贈プログラム	書籍 27 冊	
2010	国際交流基金 日本語普及活動 助成プログラム		845,61
2011	国際交流基金 日本語普及活動 助成プログラム		1163,39
2013	国際交流基金 日本語普及活動 助成プログラム		1,056,29
2014	国際交流基金 日本語普及活動 助成プログラム		651,84
計			3717.13

<国際交流基金図書寄贈プログラム>

受領年度	プログラム	受領内容	受領総額 (円)
1997	国際交流基金図書寄贈プログラム	図書 Category A1	295,441
1997	国際交流基金図書寄贈プログラム	ワードプロセッサ1台 変圧器 1台 インクリボン 1 フロッピーディスク 4	220,636
2000	国際交流基金図書寄贈プログラム	図書 55 冊	336,673
2002	国際交流基金図書寄贈プログラム	図書 31 冊	188,950
2005	国際交流基金図書寄贈プログラム	図書 52 冊	400,000
2006	国際交流基金図書寄贈プログラム	図書 48 冊	500,549
2007	国際交流基金図書寄贈プログラム	図書 52 冊	377,420
2007	国際交流基金図書寄贈プログラム	図書 55 冊	336,673
2008	国際交流基金図書寄贈プログラム	図書 63 冊	235,804
2008	国際交流基金図書寄贈プログラム	図書 11 冊	107,227
2009	国際交流基金図書寄贈プログラム	図書 56 冊	296,087
2009	国際交流基金図書寄贈プログラム	図書 22 冊	183,546
2011	国際交流基金図書寄贈プログラム	図書 103 冊	555,340
2012	国際交流基金図書寄贈プログラム	図書 65 冊 DVD 15 点	290,241
計			4,620,674

## 2. 今後の展望と課題

次に、当コースの今後の展望と課題についても触れておきたいと思えます。先にも述べたように、現在日本学コースの科目は卒業要件単位とならず、受講生は日本研究で学位を取得することができません。この状況を改善し、当コースを修士号が授与できる正規の学科に格上げすることが、この15年間、受講生、卒業生、教員たちがずっと抱き続けてきた「悲願」、と言ってもよいものです。当学部の歴代の学部長、インド・極東学科学科長、歴代の駐クロアチア日本国特命全権大使の方々や在クロアチア日本国大使館の職員の皆さまには絶えることなくお力添えをいただき、また、近隣諸国の大学の日本語・日本学学科の教員の皆さま、当コースの卒業生の皆さまからも折に触れて温かい励ましのお言葉やご助言をいただき、心より感謝しております。

しかし、ボローニャ・プロセス参入の折、その手続きのために大学の予算及びマンパワーが割かれてしまったこと、その後、2009年以降は経済危機の影響による全国的な経済的緊縮策が取られたこと、学部の行政担当者が交替したこと…などのさまざまな要因が重なって未だ実現していません。様々な機会を捉えて、今後も実現の可能性を探っていきたいと思っています。

おわりに

上に述べたように、まだ課題は山積していますが、個人的には、私が当初は外国人講師として2010年に着任して以来、日本語・日本文化を愛する、学習意欲に燃えた学生の皆さんたちとこれまで過ごすことができ、皆さんから学ぶことも多く、素晴らしい時間を持てたことに感謝しています。加えて、哲学部の教職員の皆さま、当コースと協働して下さった関係各機関の皆さま、もっと言えば、日本語・日本文化教育、研究のために尽力しておられる全ての皆さまに感謝して、そして一層のご厚情を賜りますようお願い申し上げます、筆を擱きたいと思えます。